

早稲田大学環境総合研究センター・ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第 10 回運営会議
議事メモ

日時：2018 年 11 月 16 日（金）15:00～17:50

会場：福島県広野町公民館 2 階小会議室（福島県双葉郡広野町中央台）

記録：山田美香＋李洸昊

出席者（敬称略）：

松岡 俊二	早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長 早稲田大学アジア太平洋研究科・教授
小松 和真	福島県広野町復興企画課・課長補佐
阿部加奈子	福島県広野町復興企画課・主任主査
根本 賢仁	NPO 法人・広野わいわいプロジェクト・理事長
磯辺 吉彦	NPO 法人・広野わいわいプロジェクト・事務局長
菅波 香織	未来会議・事務局長・弁護士
南郷 市兵	福島県立ふたば未来学園高等学校・副校長
永井 祐二	早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授
松本 昌弘	福島県楡葉町建設課都市計画係・主任主査
松島 武司	（一財）福島イノベーション・コースト構想推進機構

事務局

李 洸昊	ふくしま広野未来創造リサーチセンター事務局
山田 美香	早稲田大学アジア太平洋研究科・博士後期課程

1. 11/2(金)テーマ3ワークショップ(T3WS)の総括

- ・テーマ 3WS では、「地域に根差したエネルギーのあり方」について議論した。規模も定義も違う中での議論であったが、基本的には再エネを地域再生に繋げようとする動きであることが確認できた。
- ・論点をまとめると、佐々木さんは「大規模の方が分散システムより効果的である」、小野田さんは「大きな規模での分散を想定」、稲垣さんは「シュタットベルケを考えたとき、自治体や小規模だけでは難しい」ということであり、地域の枠組みは柔軟に考える必要がある。地域電力を目指すなら、地域の電力シェアを握るサイズ感を抑える必要があり、2050 年から逆算して考え、現在の取組みを検討すべきである。担い手は、必ずしも地方自治体とせず、企業や電力業者との連携も視野に入れ、検討すべきである。また、ポスト FIT の社会モデルの検討も必要である。
- ・大規模でやる場合は、地域社会がどう介入していくのかわからないし、小規模では、住宅メーカーとの連携なのかも見受けられたが、小野田さんと佐々木さんは同じ規模で話をしていたように思う。
- ・ある程度、具体的な提案ができるのがテーマ 3 ということで検討してきた。いろいろな可能性あるいはアイデアを実現していくのであれば、アクションを起こしていかなければならない。東電との具体的な連携も考慮する必要がある。
- ・現在、復興という側面から東電に再エネ関連の協力を依頼する余地はあるが、実際、現在は汚染水の件で余裕がないと考えられる。広野町としては、東電に具体的な再エネ関連事業の協力の要望はしているが、ビジネスあるいは地域貢献としての協力はまだできていないのが現状である。広野火力の 1 号機・2 号機が古くなっているため、替える必要があるが、脱炭素の動きを鑑み、新電力による再エネ検討の要望をしている。この背景には、現在の出力を落としたいということがある。
- ・単純に再エネだけでなく、地域社会の将来のあり方ということ盛り込むとテーマ 3 の将来像が浮かびあがるが、東電ありきで描きたくはない。大規模ということで地元で 5%のお金を落とすのか、地域で意思決定できるものにするのかというアプローチによって違ってくるため、いずれかの実証をやっていきたいと考えている。2019 年 1 月 27 日の第 3 回ふくしま学（楽）会に向け、もう一歩踏み込んでいきたい。

2. 11/16(金)テーマ2ワークショップ(T2WS)を終えて

- ・開催実施：11:30～14:10
- ・開催場所：広野町公民館
- ・参加者数：21 名

・プログラム

【開会】 11:30-11:40	開会挨拶：松岡俊二
【趣旨説明】 11:40-11:50	趣旨説明：大手信人
【報告①】 11:50-12:30	福島相双復興官民合同チーム・営農再開グループ：高津参事 「原子力被災 12 市町村における営農再開支援の取組みについて」
【報告②】 12:30-13:00	杉野弘明（東京大学大学院農学生命科学研究科助教） 「飯館村における農業再生と風評被害払拭のための教育研究プログラム」
【報告③】 13:00-13:20	石川裕彦（京都大学防災研究所教授） 「浜通り人と森のイノベーション・コースト」
【休憩】 13:20-13:25	
【総合討論】 13:25-14:10	コーディネーター：大手

- ・テーマ2ワークショップでは3つの報告があったが、その中でも相双復興官民合同チームに広野町と檜葉町の農業関係の方々から質問が相次いだのは、印象的であった。今回、広野町と檜葉町が営農再開という段階から次の課題に向かっていることが確認でき、各地域において抱える課題が違うことが明らかになった。農業復興といっても地域によって違いがあるが、共通課題は担い手の問題であり、今後10年は良いとしてもその後をどうするかを考える必要がある。放射線問題のウェートが高いところは、食用ではない花卉類などの検討が可能であり、1つの提案ではなく、複数の提案が必要であることが明らかになった。今回の農業関係者の質問は非常に参考となった。
- ・実際、広野町などでは放射能があまり問題にならなくなったのは事実である。その中で担い手の問題と関連させながら、農地の活用を考えると、水田を畑にするということは、排水等から難しいと考えられる。もし、今後、企業との結びつきで、特産品に特化できるのであれば、それもいいのではないかと。企業からの需要と供給で基盤づくりが可能になると考えられる。四倉のトマトランドはJRがやっており、今後の仕組みづくりにおいて企業との連携でやっていける可能性も考慮する必要がある。条件不利を抱えながら販路開拓をするのであれば、企業との連携を探るのは悪くはない。
- ・福島ならではの集約のインセンティブが考えられるのではないだろうか。現在は補助金制度もあるため、それをインセンティブとして活かせるような販路であれば、経産省もそれを積極的に検討してくれる可能性が高い。しかし、今は農業をはじめようという人向けのインセンティブがあるだけの状況である。ただ、経産省は、農業に特化しておらず、実施されているのは、イノベ関連で進出してくるところにある。
- ・さつまいもの事例があげられていたが、この地域から新しいものを作っていけるよう、技術の活用が出来るような制度設計の検討はできるだろう。実際、檜葉町では、ゴマの話もあって、目星をつけていたが、担い手が見つからない。耕作放棄地をどうにかしなければならぬ、あるいは、農家をどうにかしなくてはいけないが、先が見えなくなっている。もともと地域産業であった農業であるため、支援をしようとしているが、地域の担い手がないという問題がある。将来的には、少なくとも高く売るというブランディングをしていかなければならないと考えている。売れる分しか作らないではなく、どのように売るのが、ブランディングやマーケティングが課題ではないかと思う。
- ・他の地域からの需要がないなら、地産地消でもいいが、福島の農業への期待が少ないのは問題である。福島の農地は他の土地と比べて生産性が高い土地である。未来志向型のインセンティブが働かないといけませんが、現状対処にしかになっていない。そのため、今後は未来志向に捉えればいいのか。次のふくしま学（楽）会に向け、農業は、人それぞれ思いがあるため、多様な思いをどうするかということでもとめ、何故、この土地で農業をしていかなければならないのか、いくつかの可能性を示せば良いのではないかと。

3. 12/9(日)開催予定のテーマ4ワークショップについて:菅波香織

- ・中間貯蔵（双葉町）も含めて、環境省から話が聞きたいという声があり、住民の中には、このまま最終処分になるのではないかとということで、関心は非常に高い。今、現状のものを処分することなので、30年経過すれば問題がなくなるということではないが、少し今後の先は見えているように思える。
- ・今回の T4 ワークショップは、「議論することに意義がある」あるいは「議論のやり方に意義がある」ということのいずれになるだろうか。いずれにせよ、世界中から研究者が集まるというような、希望ある議論になればいいと思う。例えば、瀬戸内海の豊島は負の中にもプラスがあり、産業廃棄物法改正の契機となった。
- ・今回の WS は方法論となるため、かなりアカデミックな色彩が強くなる可能性が高い。ふくしま学（楽）会に携わるようになり、議会が物事を決めるのではなく、住民参加の重要性もわかった。しかし、多くの場合は、「役場が決めるんでしょ」と捉えられてしまうところはある。最初から「決まってるんでしょ」と受け取られてしまう傾向がある。何を対象にするかということで、会議のあり方も違ってくる。
- ・1F は観光資源になる可能性もある議論ではないだろうか。例えば、アーカイブ施設で入場料をとってオペレーションしてもいいだろう。
- ・1F 廃炉は第2の「もんじゅ」になる可能性もあるが、イノベーション・コースト構想より違う入り方を模索していきたい。事業計画を作成しているが、「未来予想」というよりは、「目指すべき姿」あるいは「展望」、あるいは、RC として議論を踏まえてより現実味のある将来像を考える必要がある。行政に対して、住民の立場に立った提言ができればいいのではないだろうか。
- ・目指したいのは、人口増よりは、魅力あるまちづくりである。持続可能といったときに必要なのは、面的な DMO なのかもしれないが、コミュニティがどうなるのかが見えてくると、2050 年も描けるのではないかと。廃炉についてはデブリの取り出しまではやると思うが、後はできるだけ縮小させて処分ということになるだろうが、相当なコストがかかる。国が決めて、住民ががっかりするのはもうやめて、誰が決めるのか、地元か、税金を支払っている国民か、国民的議論を期待する。
- ・廃炉政策は費用から破綻するのではないかと感じる。学者・研究者に代替案の要望があるかと思うが、このような重要な政策決定を市民の側から阻止する仕組みづくりはどうすればいいのかと考える。大きな問題になればなるほど急には変えられないというのが、原子力政策ではみられる。

4. テーマ1「まちづくりと住民参加」:小松和真

- ・現在考えているテーマ1の WS のイメージは、文化財保護の観点から県や教育委員会の関係者に声がけしようかと思う。小学校から卒業制作の復活は断られ、絵を描くだけでなく、アーティストと一緒に活動をするとかということも考えられる。福島でもアートテクノロジー、ふくしま財団の小名浜の水族館で映像を使った 3D アート（3D で地域の映像を流し、バーチャル体験をするアート）、田んぼアートなどがある。1/27 のふくしま学（楽）会を考えると、福島大学の渡辺晃一先生にも相談しながら、学会にむけてアートによるまちづくりの調整をしている。イメージとして、国際フォーラムの続きのようなのがいいのではないと思う。
- ・福島県内でも、「福島ビエンナーレ」は始まっており、同じようなものになるが、最終的には「大地の芸術祭」を目指したい。テーマ2・3・4 でやっていたことがやや具体的なものが、テーマ1、アートとの関連でいけば、アーカイブのような形で目に見えないものや語れないものを残していけるようなアートと考えればいいのではないかと。
- ・事前にアーティストを呼んで、地域を理解してもらい、制作してもらった方がいいのかと思う。例えば、「サンチャイルド」を広野でやってどうなるのだろうか。アートは言葉にならないものを形にしているということを理解しなければ、ただ、言論闘争に使われてしまう可能性もあり、それは非常に残念である。中途半端なインスパイアが恐ろしいのだろう。
- ・「アートで地域は救えるか」という、そのような方向を目指すなら、その布石、どう考えて何をやればいいのか。RC としての検討すべきアプローチとすればいいだろう。

5. 今後のリサーチセンター事業の進め方について

- ・福島事務局体制について：今後は、広野町役場が RC の福島事務局を担っていくことを、遠藤町長と確認（11 月 16 日）した。
- ・招聘研究員の拡大：阿部加奈子（広野町復興企画課・主任主査）が加わり、本日の T2WS・運営会議から参加する。

6. その他

11/22(木)早稲田大学・学部演習・戦略的環境研究

「エネルギーと原子力を考える：レジリエンスとサステナビリティ」公開ワークショップについて

配布資料「公開ワークショッププログラム」参照。

- ・既に案内済みである 11/22（木）の演習科目の公開ワークショップについて、再度、案内し参加を依頼する。菅波さん、島村さんが参加予定。

1/27(日)第 3 回ふくしま学(楽)会について

- ・会場は檜葉町のみんなの交流館ならは CANvas とする。今後、檜葉町の RC 招聘研究員を拡大する。
- ・時間については 10:30～17:30 とする（到着：竜田着 09:52／出発：竜田発 18:27）

7. 今後のスケジュール

2018 年

11/22（木） 13:00～16:15	戦略的環境研究「エネルギーと原子力を考える：レジリエンスとサステナビリティ」公開ワークショップ@早稲田大学 22 号館 207 教室
12/9（日）13:30～16:30	（テーマ 4）ワークショップ@いわき市いわき産業創造館
12/14（金）15:00～18:00	第 11 回運営会議（第 3 回ふくしま学（楽）会について議論予定）

2019 年

1/15（火）～1/17（木）	早稲田大学環境・エネルギー研究科「日本・中国環境実践研究」 福島視察（檜葉町、1F、いわきおてんと SUN 企業組合）
1/18（金）	（テーマ 1）ワークショップ（未定）および第 12 回運営会議
1/27（日）	第 3 回ふくしま学（楽）会@檜葉町みんなの交流館ならは CANvas
3/7（木）	第 8 回原子力政策・福島復興シンポジウム@早稲田大学

以上